

詳細1：NUT「教員」誌（抜粋）

2007年12月に公表された第三回国際教育到達度評価（PISA）の結果、以前の調査結果～フィンランドの子どもたちは数学的リテラシーが一位で、科学的リテラシーと読解力が2位という顕著な好成績をおさめた～が、より強固なものとなった。

知識の応用力に焦点をあてた PISA 調査は、OECD が三年ごとに実施している。今回は 58ヶ国の 15 歳児を対象とした。

PISA での好成績はフィンランドの学校への関心呼び起こした。オウルウ（Oulu）大学でグローバル教育を担当しているラウニー・ラザネン（Rauni Räsänen）教授は、世界中からやってくる教員や政策担当者に「それはすべて、初めの段階から始まります」と説明している。続けて彼女は以下のように説明してくれる。

「フィンランドが長年 PISA でトップにあるのは偶然のことではありません。お話しするのは難しいのですが、フィンランドにはいくつかの長所があると私は考えています。その一つは、修士号を持っている教員を配置して幼児教育（early childhood education）を体系的、専門的に行っていることです。」

就学前教育に続いて、7歳のすべての子どもたちが9年間の総合的教育を受け始める。学校の施設・設備は整っており、学級規模は20人から30人までである。子どもたち全員が毎日暖かい食事をとり、保健や歯のケアも学習材（learning materials）も無料である。「総合的な学校教育がフィンランド・システムの土台であり成功の鍵になっているのです」とラーザン教授はきっぱりと指摘する。さらに彼女は「フィンランド・システムには公正という価値が基礎となっています。PISAの結果にこのことがよく表れています。フィンランドには学校間や地域間の格差がほとんどないのです。」と説明する。

保護者の社会経済的地位と生徒の達成度との間にみられる関連性があらゆる国の弱点の一つになっている。公正さの追求は才能のある生徒への支援を犠牲にしているとして、フィンランドの方法を批判する人たちがいる。だが、この主張は PISA の結果とは異なっている。というのも、フィンランドでは生徒の 3.9% がもっとも成績のいいレベルに到達しているからである。この数字は国際平均の実に3倍に相当するのだ。

公立の総合的学校の成功は、程度の高い私立学校がなくてもいいということを意味している。総合的な教育の後には、3年制の高校か職業教育が続いている。そこでは青年の約 96% が何らかの教育を受けるようになっている。

しかし、フィンランドの成功は教育にかなりお金をかけているからであろうか？ いや、それは正確でない。教育には GDP の 6.1% が当てられているが、これは OECD 諸国の平均を下回っている。

しかし、かなり投資が行われている分野がある。教員は5年間の第三期教育が必要な修士の学位を持たなければならない。大学教育は無償となっているばかりでなく、学生全員が生活費を支給され、住居や食事には補助も出る。

それほど十分な財政措置はなされていないけれど、教職は公的な支援があり信頼性のある魅力的な職業の一つになっている。無理強いされた評価、全国テストそれに各学校が対抗関係になる学校順位一覧といったことはフィンランドには存在しない。

フィンランドが達成してきた学校教育の成功をもたらした方法から学び、それに感嘆することは多々ある。しかし、新自由主義の教育改革の唱道者たちを元気づけるものは何もない。